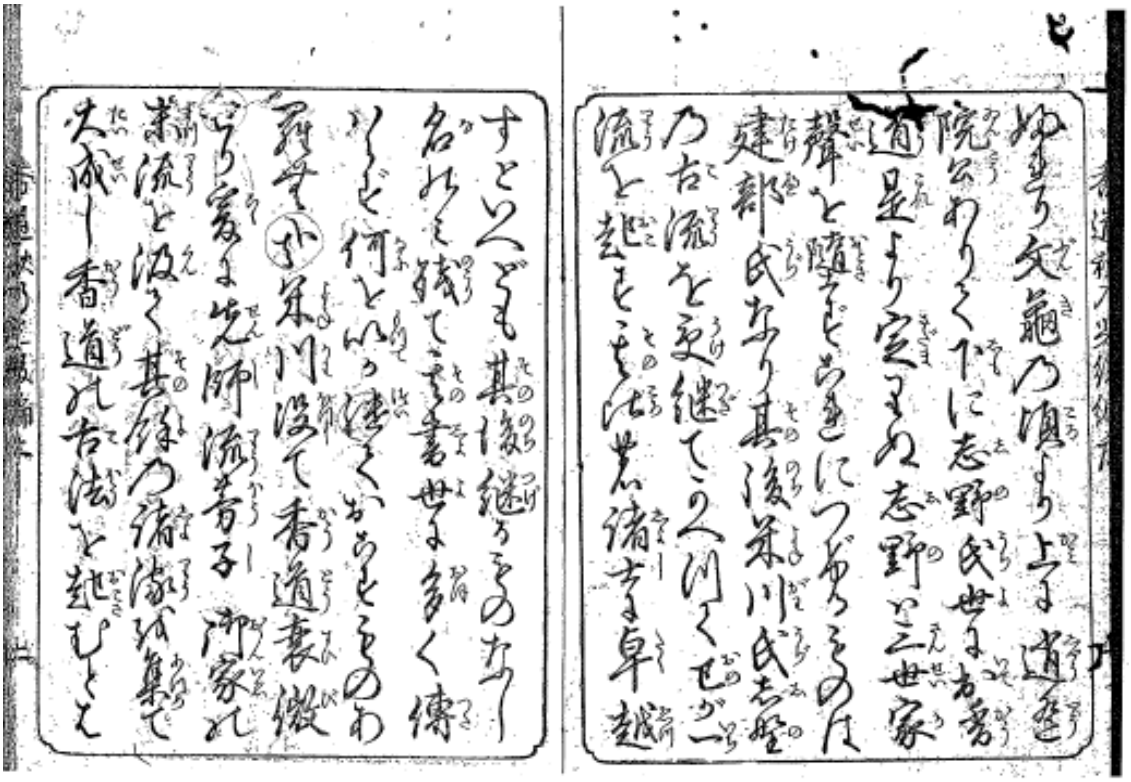
# 香道千代乃秋

大枝流芳編　元文元年　3巻4冊　版本

大阪府立図書館　所蔵

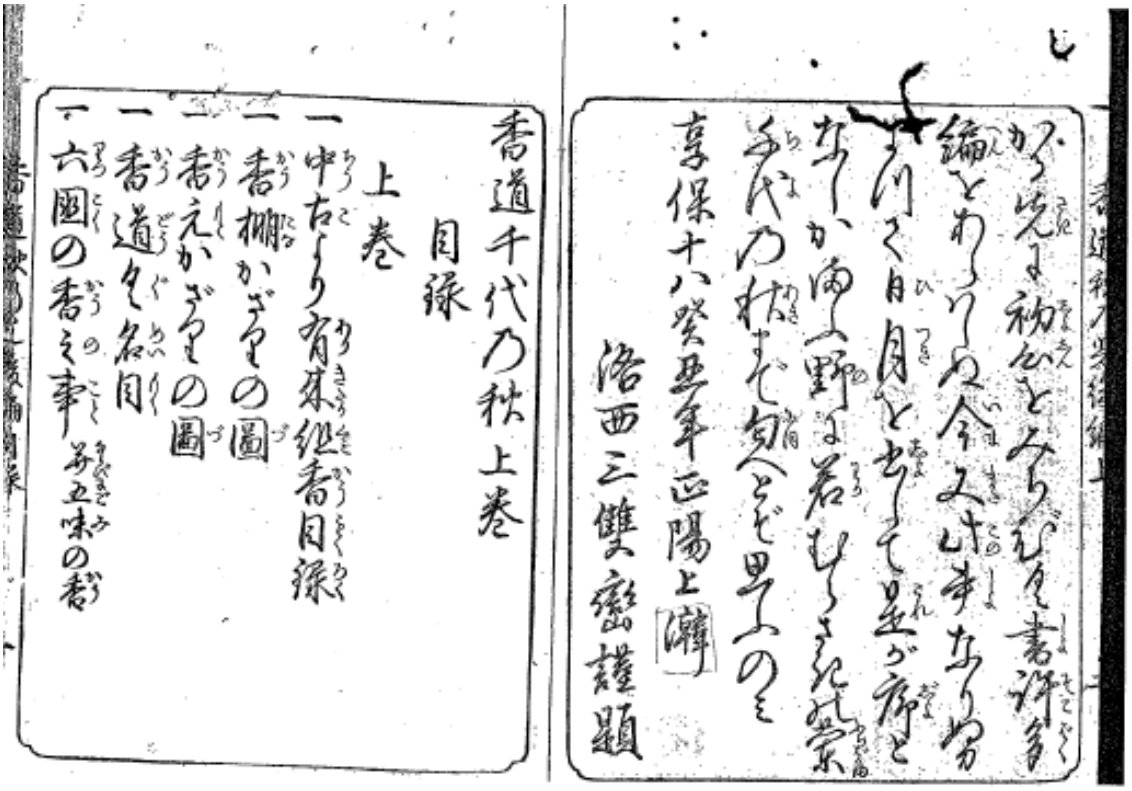
## 香道千代の秋　序

千代の後まで伝うべきものは
紙上の語なり。金石に鐫(ゑる)ものも
かぎりありて摩滅す。道をのせ
ことを伝うべきは、只書のみ。伝写
して断ざる時は、千歳に芳しきを流(ながさ)
むものか。ここに香を翫ぶの事、既に



ふれり。文亀の頃より上に逍遥
院公ありて、下に志野氏世に出で、香
道、是より定まりぬ。志野は三世家
声を堕(おとさ)ず。これにつげるものは
建部氏なり。その後、米川氏、志野
の古流を受け継ぎて、かえって己が一
流を起こす。その頃の諸士に卓越

すといえども、その後継げるもの無し。
名のみ残りてその書世に多く伝
わらず、何を以ってか継(つい)で起すあ
らむ哉(や)。米川没して香道衰微
せり。ここに先師流芳子、御家の
末流を汲んでその餘の諸流を集めて
大成し、香道の古法を起さんとは



かる。先に初心をみちびく書、許多（そこばく＝あまた）
編をあらわしぬ。今また此の書なりぬ。
よって日月を書して是が序と
なし、かまう野（蒲生野）に若むらさきの蘭（ふじばかま）
千代の秋まで匂えとぞ思うのみ。

享保十八年癸丑年正陽上澣

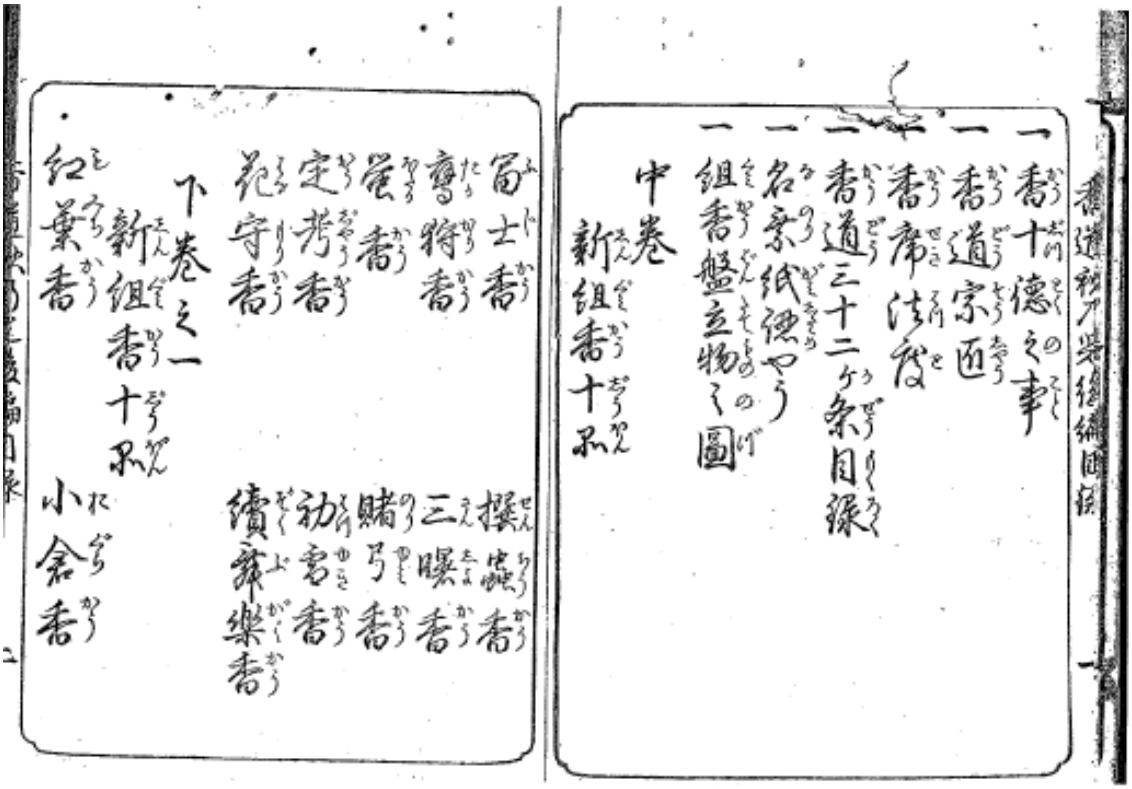
洛西三雙巒謹題

## 香道千代乃秋上巻

目録

上巻


一 中古より有り来たる組香目録
一 香棚かざりの図
一 香元かざりの図
一 香道具名目
一 六国の香之事　並びに五味の香

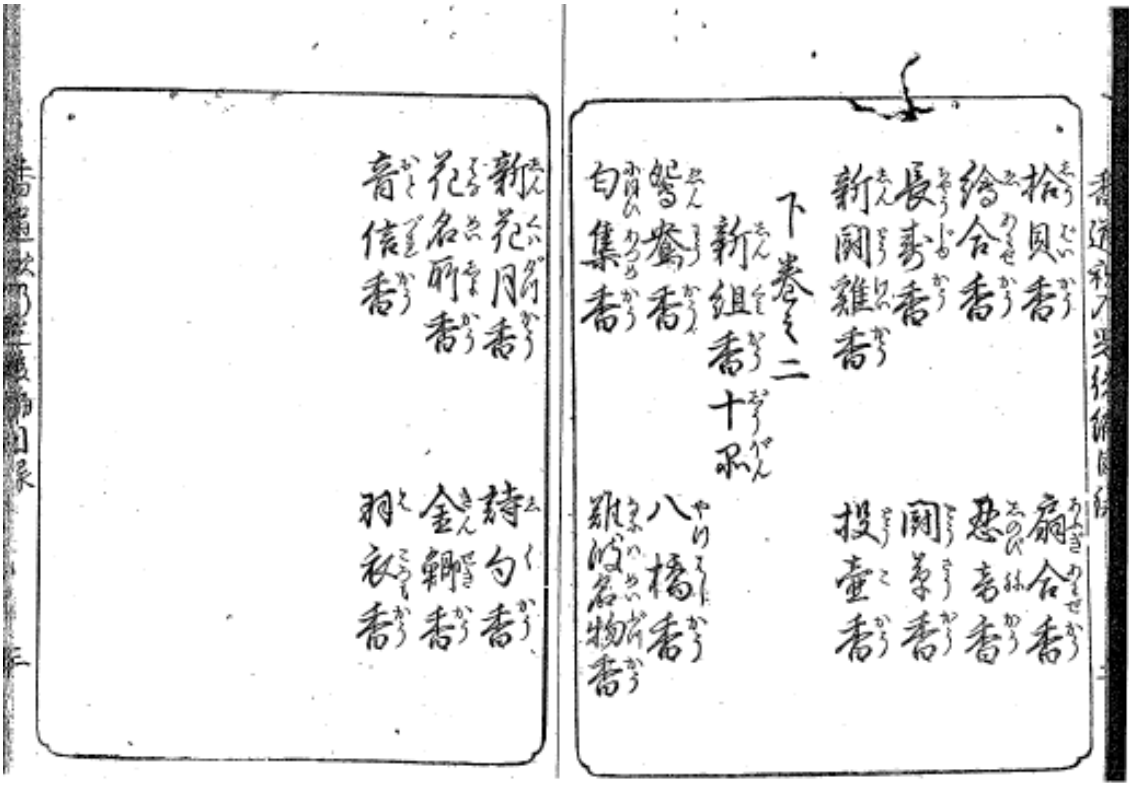


一香十徳之事
一香道宗匠
一香席法度
一香道三十二ケ條目録
一名乗紙認(したため)やう
一組香盤立物之図

中巻
新組香十品

冨士香　撰虫香
鷹狩香　三曙(さんしょ)香
蛍香　賭弓(のりゆみ)香
定考(こうじょう)香　初雪香
花守香　續舞楽香

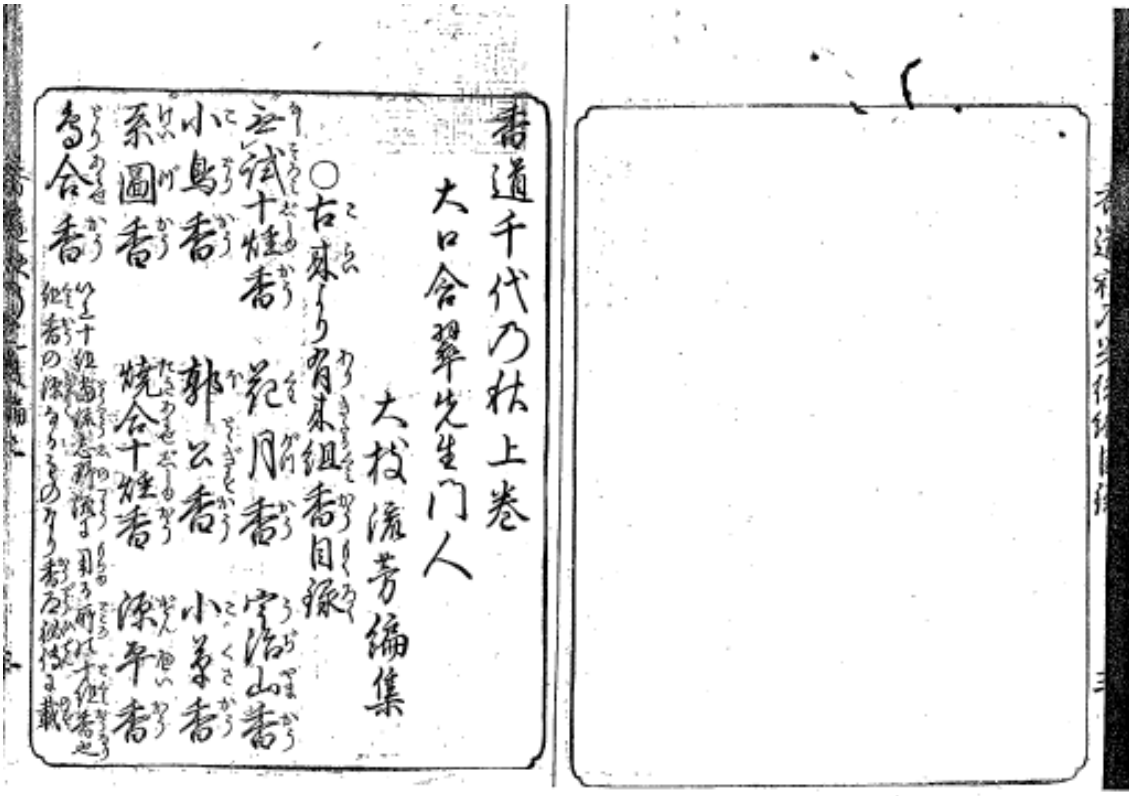
下巻之一
新組香十品
紅葉香　小倉香



拾貝(しゅうばい)香　扇合香
絵合香　忍音香
長寿香　闘草香
新闘鶏香　投壺(とうこ)香

下巻之二
新組香十品
鴛鴦(えんおう)香　八橋(やつはし)香
匂集(にほいあつめ)香　難波名所香

新花月香　詩句(しく)香
花名所香　金鯽(きんせき)香
音信(おとずれ)香　羽衣香




香道千代乃秋上巻

大口含翠先生門人

大枝流芳編集

○古来より有り来たる組香目録

無試十炷(なしこころみじっしゅ)香　花月香

宇治山香　小鳥香

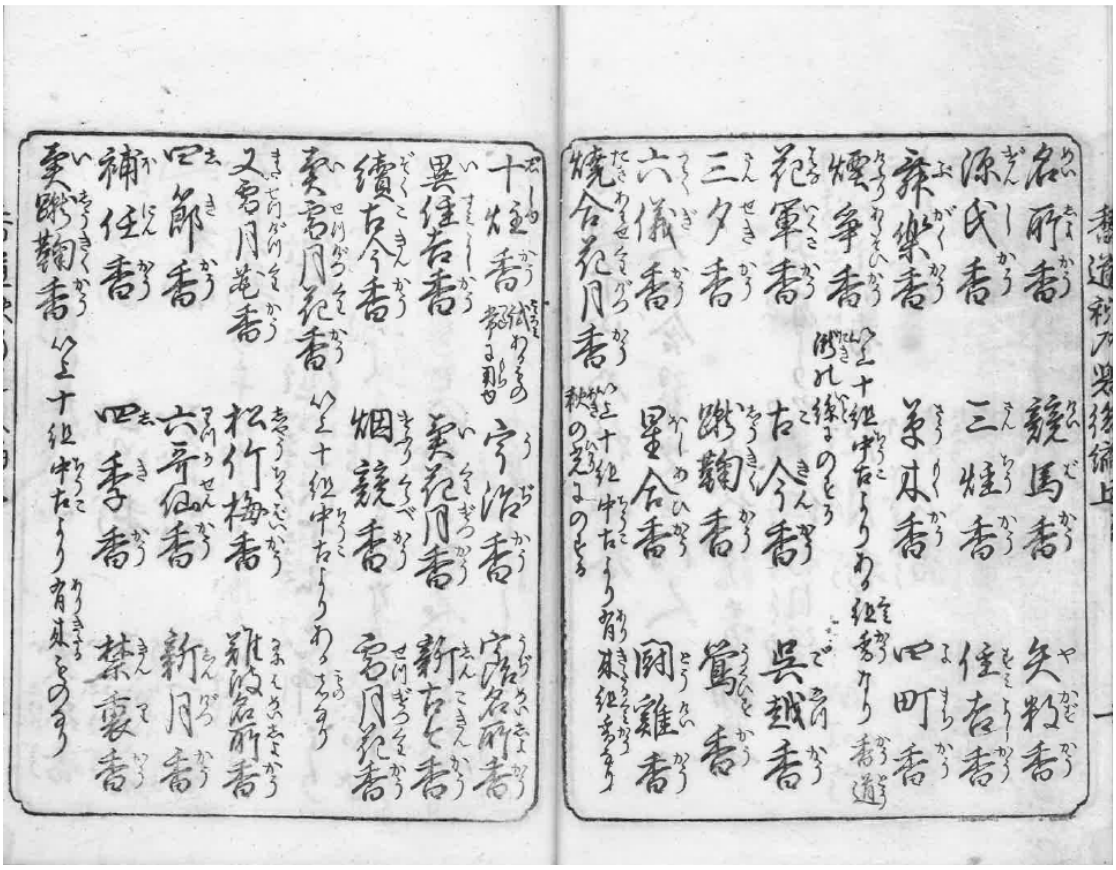
郭公(ほととぎす)香　小草(こくさ)香

系図香　焼合十炷(たきあわせじっしゅ)香

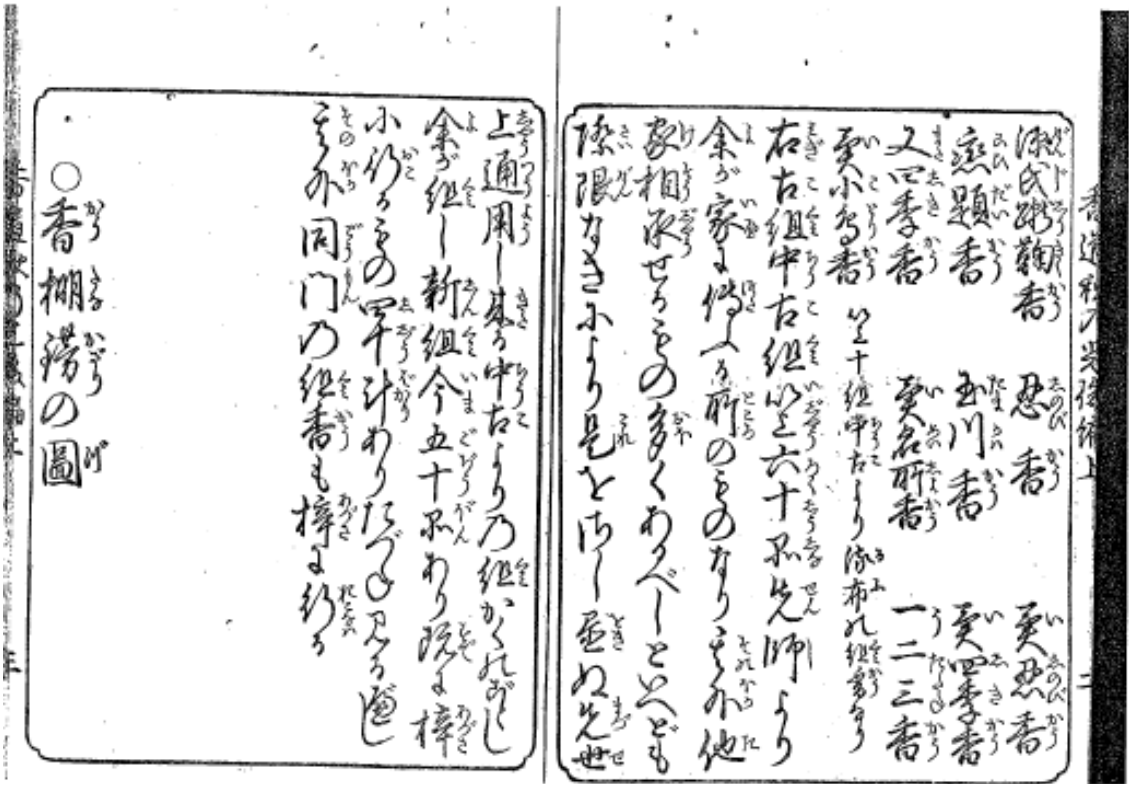
源平香　鳥合香

以上十組、当流志野流に用ゆる所の十組香なり。

組香の源なるものなり。『香道秘伝書』に載す。



名所香　競馬香　矢数(やかず)香
源氏香　三・(さんちゅう)香　住吉香
舞楽香　草木(そうもく)香　四町香
煙争(けむりあらそい)香
　以上十組、中古よりある組香なり。『香道
　瀧の絲』にのす(載)る。
花軍(はないくさ)香　古今香　呉越香
三夕(さんせき)香　蹴鞠(しゅうきく)香　鴛香
六儀(りくぎ)香　星合香　闘鶏香
焼合花月(たきあわせかげつ)香
　以上十組、中古より有り来る組香なり。
　『秋の光』にのする。
十・香(試あるもの常に用ゆ)　宇治香　宇治名所香
異住吉香　異花月香　新古今香
續古今香　烟競(けむりくらべ)香　雪月花香
異雪月花香
　以上十組、中古よりある者なり。
又雪月花(またせつげつか)香　松竹梅香　難波名所香
四節香　六歌仙香　新月香
補任(ほにん)香　四季香　禁裏香
異蹴鞠香
　以上十組、中古より有り来るものなり。



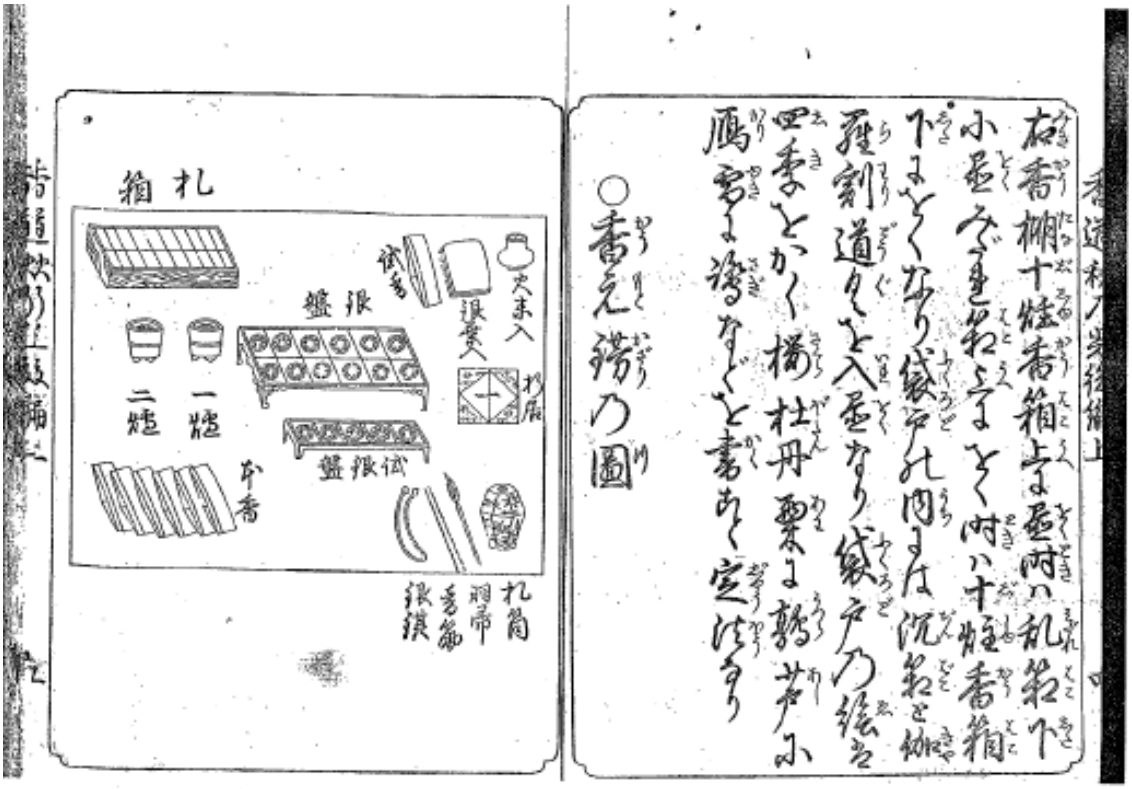
源氏蹴鞠(げんじしゅうきく)香　忍(しのび)香
異忍(いしのび)香　恋題香
玉川香　異四季香
又四季(またしき)香　異名所香
一二三(うたたね)香　異小鳥香
以上十組、中古より流布の組香なり。

右古組、中古組以上六十品、先師より
余が家に伝うる所のものなり。その外、
他家相承せるもの多くあるべしといえども、
際限なきにより是をさし置きぬ。先ず世

上通用し来たる中古よりの組かくのごとし。
余が組みし新組、今五十品あり。既に梓
に行(おこ)るもの四十ばかりあり。たずね見るべし。
その外、同門の組香も梓に行(おこなわ)る。

○香棚飾の図

[図]

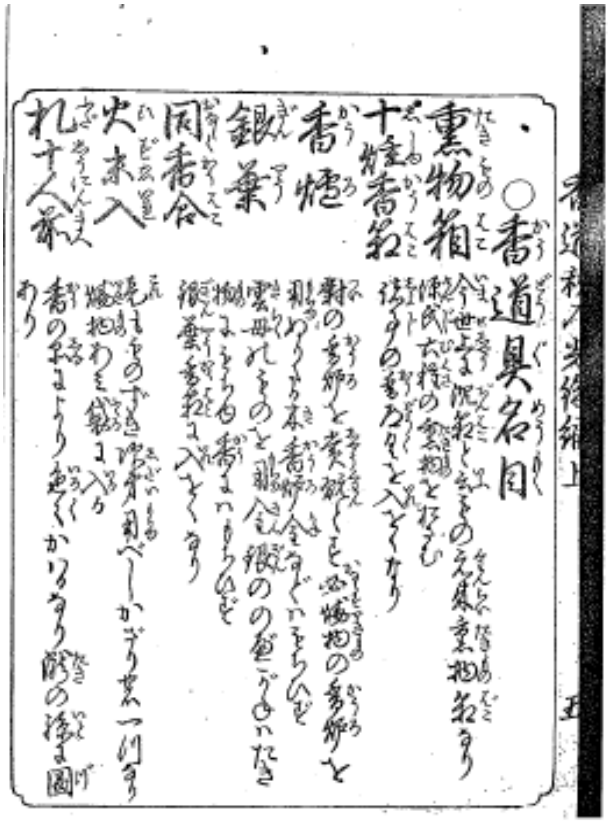



右香棚、十炷香箱上に置く時は、乱箱下に置く。みだれ箱上におく時は、十炷香箱下におくなり。袋戸の内には沈箱と伽羅割道具を入れ置くなり。袋戸の絵は四季をかく。桜、牡丹、栗に鶉(うづら)、葦に雁(かり)、雪に鷺(さぎ)などを書くこと定法なり。

○香元飾乃図

[図]

見開きを分割



○香道具名目

薫物箱（たきものばこ）
今世上に沈箱と云うもの、元来薫物箱なり。
源氏六種の薫物をおさむ。

十炷香箱（じっしゅこうばこ）
諸事の香道具を入れおくなり。

香炉（こうろ）
対の香炉を賞翫とす。必ず焼物の香炉を用ゆ。ぬりたる木香炉、金などはもちいず。

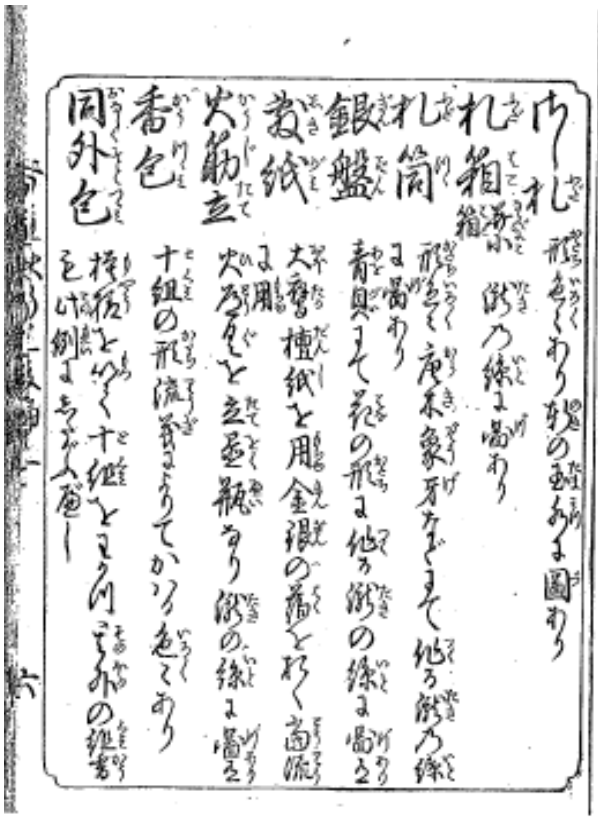
銀葉（ぎんよう）
雲母（きら）のものを用ゆ。金銀ののべがねは、たき物にもちゆ。香にはもちいず。

同　香合（おなじく　こうばこ）
銀葉、香箱に入れおくなり。

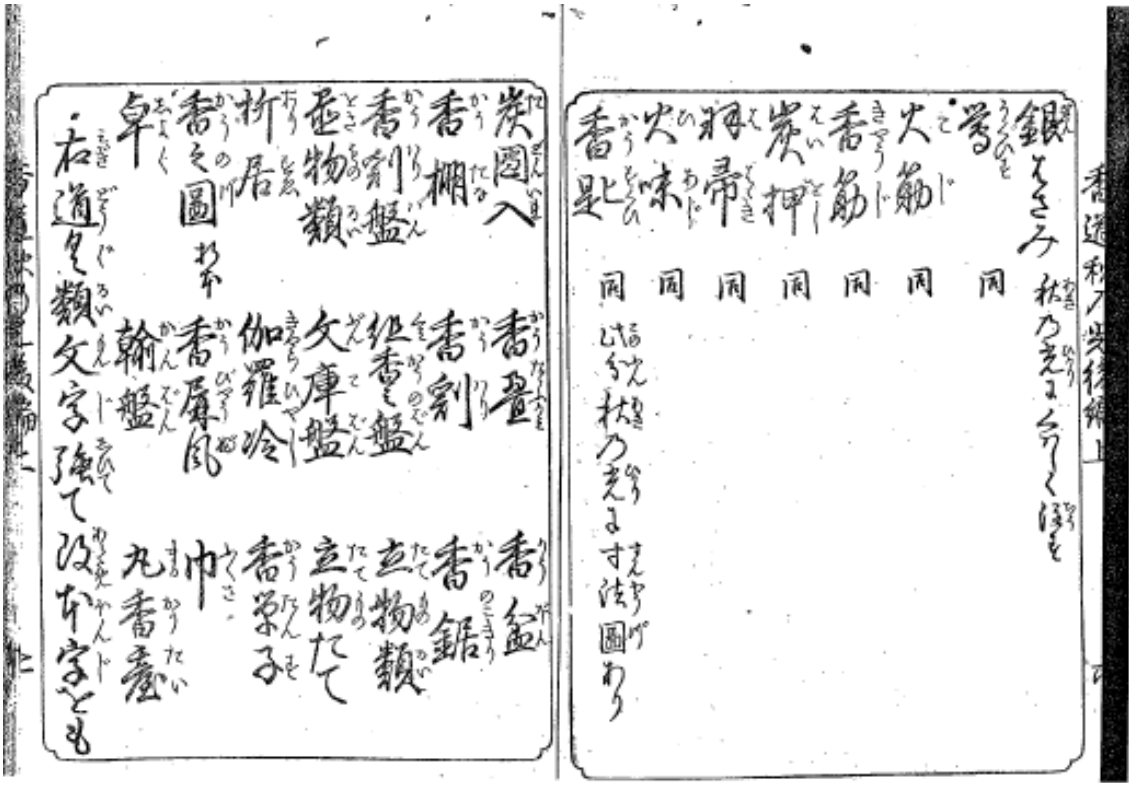
火末入（ひずえいれ）
是も、ものずき次第用ゆべし。かざりの一つなり。
焼物あみ袋に入る。

札十人前（ふだじゅうにんまえ）
香の品により色々かわるなり。『瀧の絲』に図あり。

見開きを分割



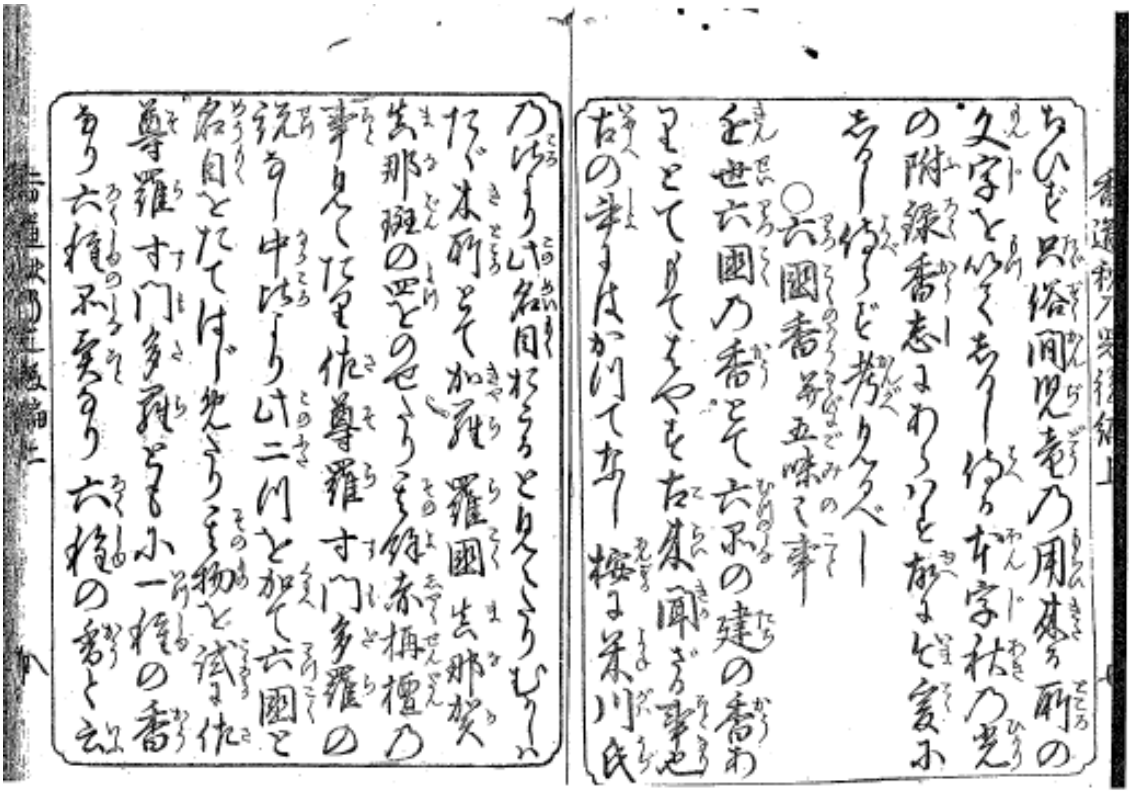

さし札(ふだ)
　形色々あり。『軒の玉水』に図あり。
札箱(ふだばこ)並びに小箱
　『瀧の絲』に図あり。
札筒(ふだづつ)
　形色々唐木、象牙などにて作る。『瀧の絲』
　に図あり。
銀盤(ぎんばん)
　青貝にて花の形に作る。『瀧の絲』に図あり。
敷紙(しきがみ)
　大鷹檀紙を用ゆ。金銀の箔をおく。当流
　に用ゆ。
火筋立(こうじたて)
　火道具を立て置く瓶(へい)なり。『瀧の絲』に図あり。
香包(こうづつみ)
　十組(とくみ)の形、流儀によりてかわる。色々あり。
同　外包(おなじく　そとづつみ)
　模様を以って十組をわかつ。その外の組香
　も此の例にしたがうべし。




銀はさみ　『秋乃光』にくわしく注す。
鶯（うぐいす）　同
火筋（こじ）　同
香筋（きょうじ）　同
炭押（はいおし）　同
羽箒（はぼうき）　同
火味（ひあじ）　同
香匙（こうすくい）　同　此の分『秋乃光』に寸法、図あり。

炭団入（たどんいれ）　香畳（こうたとうがみ）　香盆
香棚　香割　香鋸（こうのこぎり）
香割盤　組香之盤　立物（たてもの）類
置物類　文庫盤　立物たて
折居（おりすえ）　伽羅冷（ひやし）　香単子（たんす）
香之図（折本）　香屏風（びょうぶ）　巾（ふくさ）
卓（しょく）　翰盤（かんばん）　丸香台

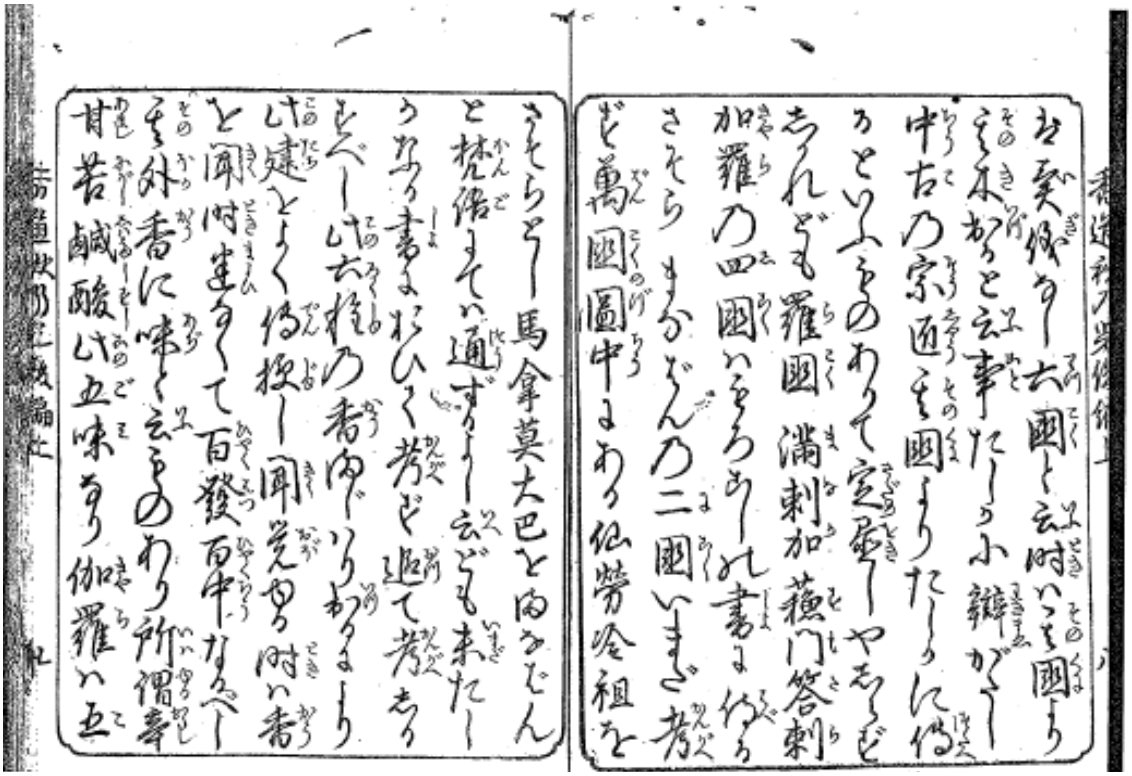
右道具類、文字強いて改め、本字をも



ちいず。只、俗間児童の用い来る所の
文字を以てしるし侍る。本字『秋乃光』
の付録「香志」にあらわす。故に、今ここに
しるし侍らず。考え見るべし。

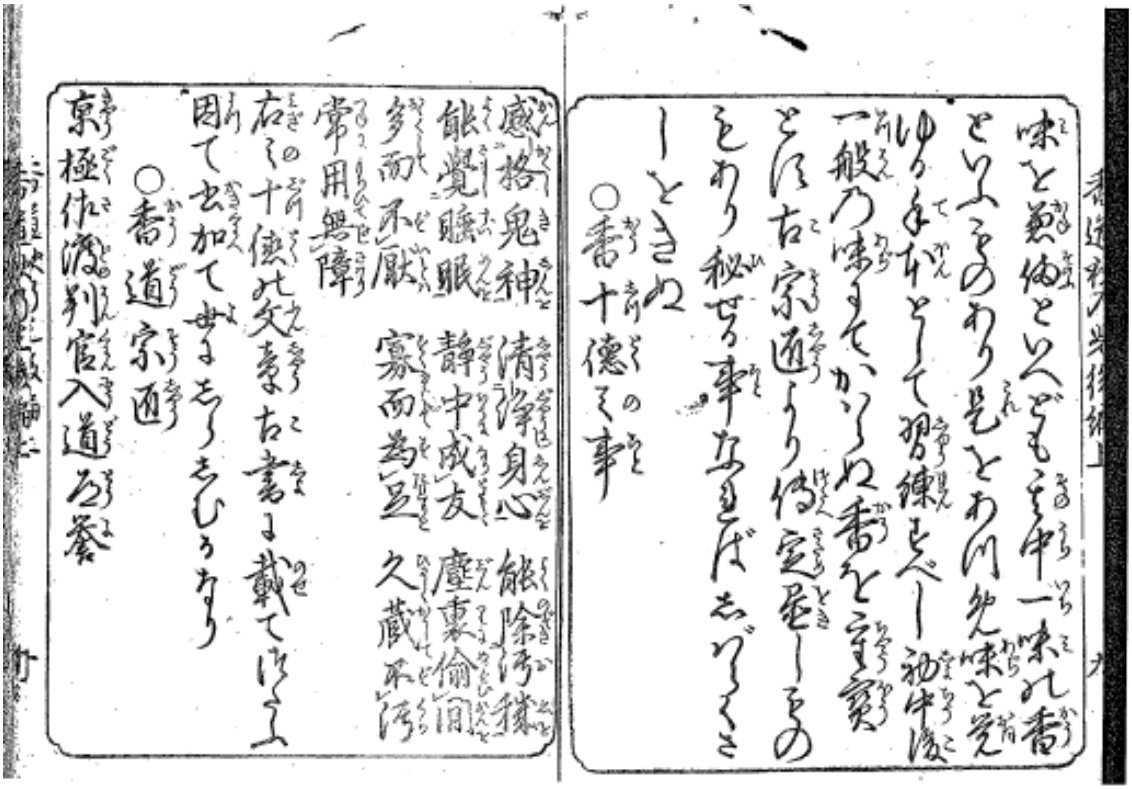
## ○六国の香並びに五味の事

近世「六国(りっこく)の香」とて、六品の建(たち)香あ
りとてもてはやす。古来聞かざる事なり。
古(いにしえ)の書にはかつてなし。按ずるに米川氏
の頃より、此の名目おこると見えたり。むかしは
ただ「木所」とて、伽羅、羅国、真那賀、
真那斑(まなばん)の四つをのせたり。その餘、赤栴檀の
事見えたり。佐尊羅(さそら)、寸聞多羅(すもだら)の
説なし。中頃より此の二つを加えて「六国」と
名目をたてはじめたり。その物を試みるに佐
尊羅、寸聞多羅ともに一種の香
なり。六種の品異なり、六種の香と云う



は異儀なし。六国と云う時は、その国より
その木出ずると云う事たしかに辯（わきまえ）がたし。
中古の宗匠、その国よりたしかに伝え
るというものありて定め置きしやしらず。
しかれども羅国、満剌加（まなか）、蘓門答剌（すもたら）、
加羅（きゃら）の四国はもろこし（唐土）の書に侍る
「さそら」「まなばん」の二国いまだ考え
ず、萬国の図中にある「仙勞冷祖」を

「さそら」とし、「馬拿莫大巴」を「まなばん」
と梵語にては通ずるよし云えども未だたし
かなる書において考えず。追って考えしる
すべし。此の六種の香まじわり出ずるにより、
此の建ちをよく伝授し聞き覚ゆる時は、香
を聞く時、迷いなくて百発百中なるべし。
その外、香に「味」と云うものあり。所謂「辛（からし）、
甘（あまし）、苦（にがし）、鹹（しおはゆし）、酸（すし）」此の五味な
り。伽羅は五



味を兼ね備うといえども、そのうち一味の香というものあり。是をあつめ、味を覚ゆる手本として習練すべし。初中後、一般の味にてかわらぬ香を重宝とす。古宗匠より伝え定め置きしものもあり。秘せる事なれば、しばらくさしおきぬ。

○香十徳之事

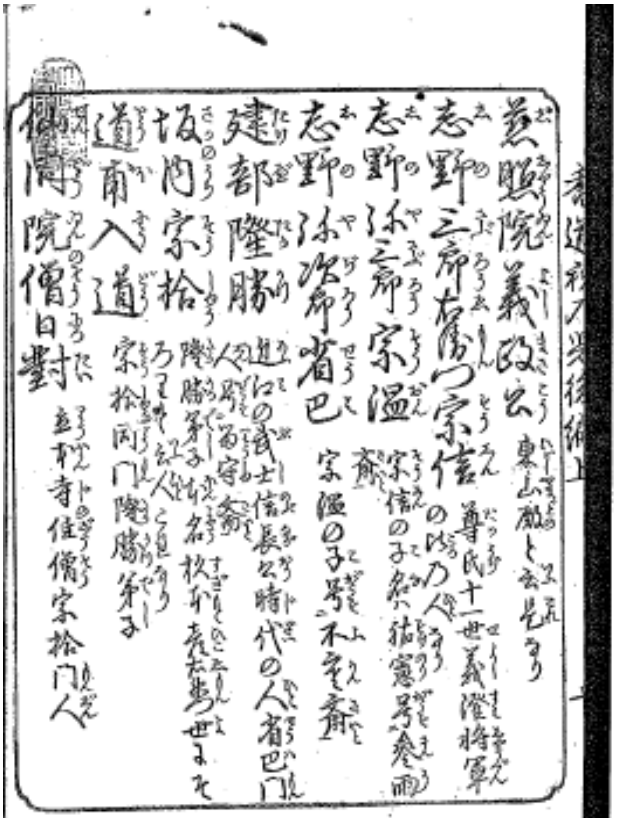
感格鬼神（きしんをかんかくし）　清浄身心（しんしんをしょうじょうにし）　能除汚穢（よくおえをのぞき）　能覚睡眠（よくすいめんをさまし）　静中成友（じょうちゅうにともとなり）　塵裏偸閒（じんりにかんをぬすむ）　多而不厭（おおくしていとわず）　寡而為足（すくなくしてたれりとす）　久蔵不汚（朽）（ひさしくかくしてくちず）　常用無障（つねにもちいてさわりなし）

右の十徳の文章、古書に載せて伝う。因って書き加え世に知らしむるなり。

○香道宗匠

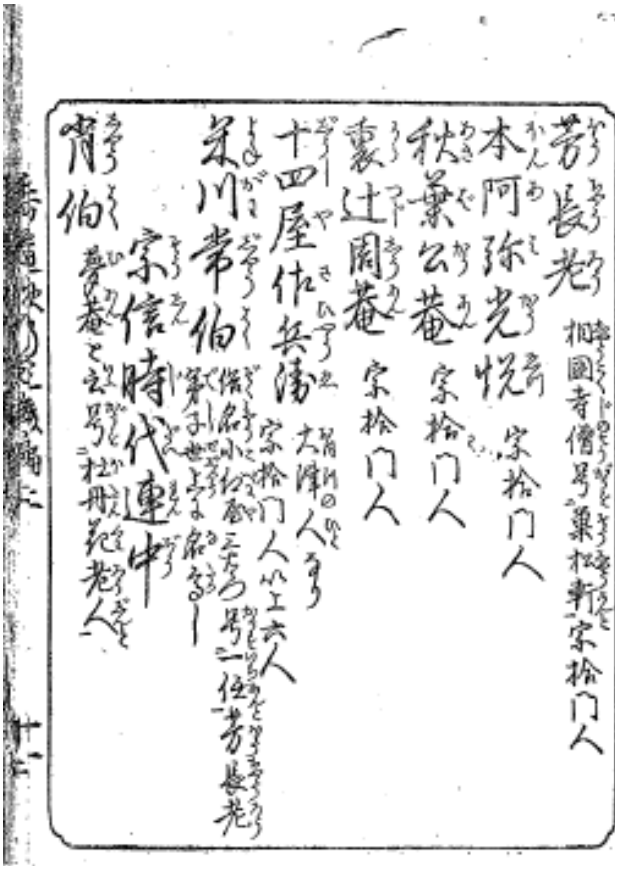
京極佐渡判官入道道誉（きょうごくさどのはんがんにゅうどうどうよ）

見開きを分割

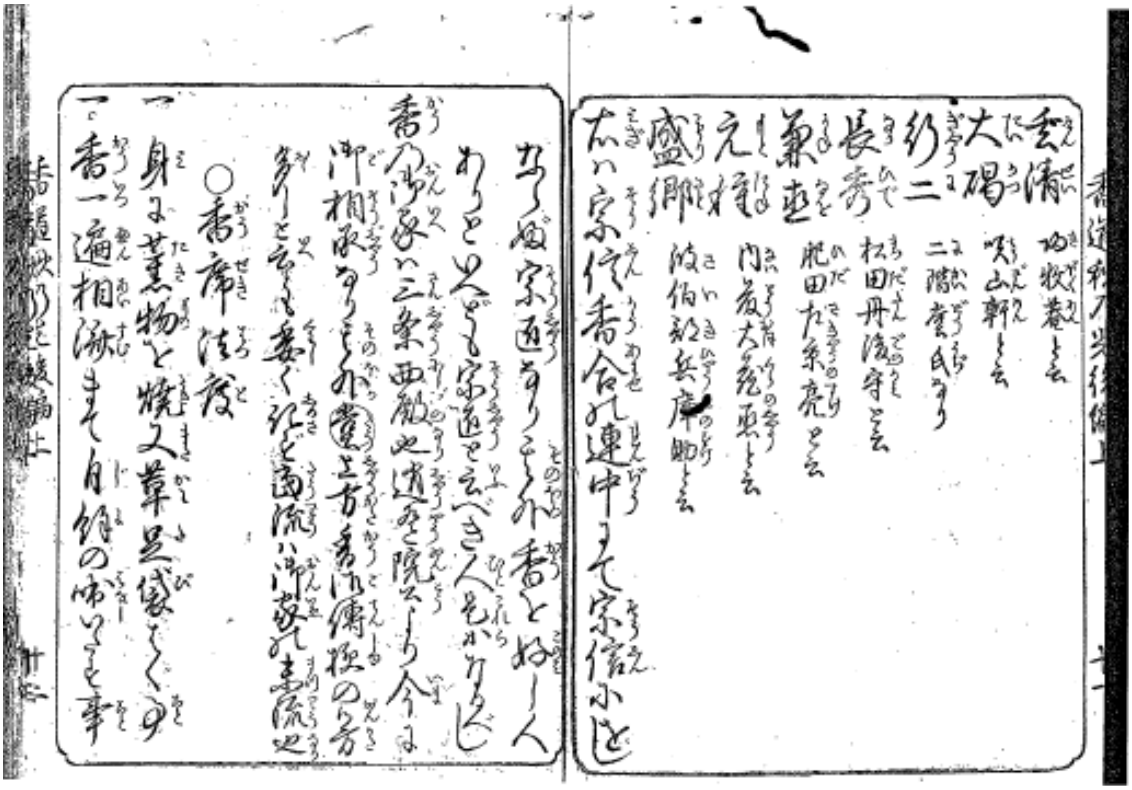


慈照院義政公(じしょういんよしまさこう)
　東山殿と云う、是なり。
志野三郎右衛門宗信(しのさぶろうえもんそうしん)
　尊氏十一世義澄将軍の頃の人なり。
志野弥三郎宗温(しのやさぶろうそうおん)
　宗信の子。名は祐憲(すけのり)。参雨斎(さんうさい)と号す。
志野弥次郎省巴(しのやじろうしょうは)
　宗温の子。不雲斎(ふうんさい)と号す。
建部隆勝(たてべたかかつ)
　近江の武士。信長公時代の人。省巴門人。留守斎(りゅうしゅさい)と号す。
坂内宗拾(さかのうちそうしゅう)
　隆勝弟子。本名、杉本彦右衛門。世に「そろり」と云う人これなり。
道甫入道(どうほにゅうどう)
　宗拾同門、隆勝弟子。
仙同院僧日對(せんどういんのそうにったい)
　立本寺(りゅうほんじ)の住僧、宗拾門人。

見開きを分割




芳長老(ほうちょうろう)
相国寺(しょうこくじ)の僧。巣松軒(そうしょうけん)と号す。
宗拾門人。
本阿弥光悦(ほんあみこうえつ)
宗拾門人。
秋葉公菴(あきばこうあん)
宗拾門人。
裏辻周菴(うらつじしゅうあん)
宗拾門人。
十四屋作兵衛(じゅうしやさひょうえ)
大津の人なり。宗拾門人以上六人
米川常伯
俗名、小紅屋三衛門。一任(いちにん)と号す。芳長老弟子。世上に名高し。
宗信時代連中
肖伯(しょうはく)
夢菴(むあん)と云う。牡丹花老人(ぼたんかろうじん)と号す。

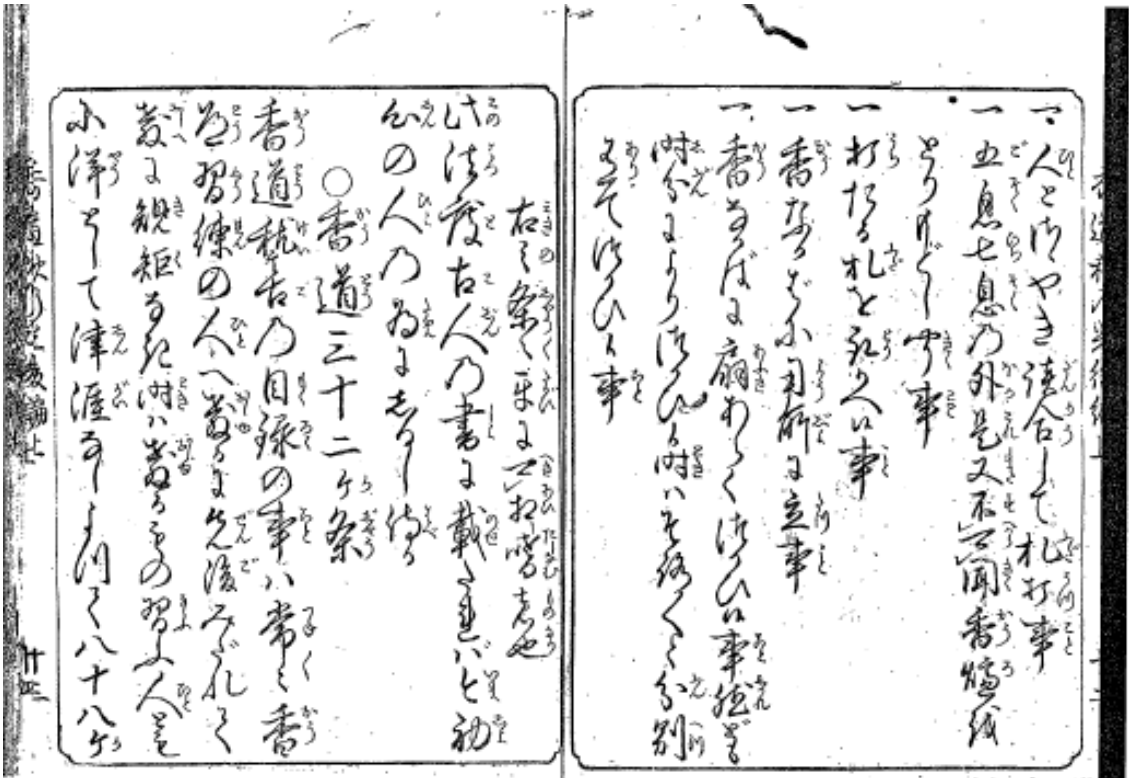


玄清（げんせい）　帰牧菴（きぼくあん）と云う。
大碣（たいかつ）　咲山軒（しょうざんけん）と云う。
行二（ぎょうに）　二階堂氏なり。
長秀（ながひで）　松田丹後守（まつだたんごのかみ）と云う。
兼直（かねなお）　肥田左京亮（ひださきょうのすけ）と云う。
元種（もとたね）　内藤大蔵丞（ないとうおおくらのじょう）と云う。
盛郷（もりさと）　波伯部兵庫助（さいきひょうごのすけ）と云う。
右は宗信香合の連中にて、宗信におし

ならぶ宗匠なり。その外、香を好みし人
ありといえども宗匠と云うべき人、是らなるべし。
香の御家は三條西殿なり。逍遥院公より今に
御相承なり。その外、堂上方（どうじょうがた）香御伝授の御方
多しと云えども委しく記さず。当流は御家の末流なり。

## ○香席法度

一　身に薫物を焼き、また革足袋はく事
一　香一遍相済むまで自餘の話いたす事

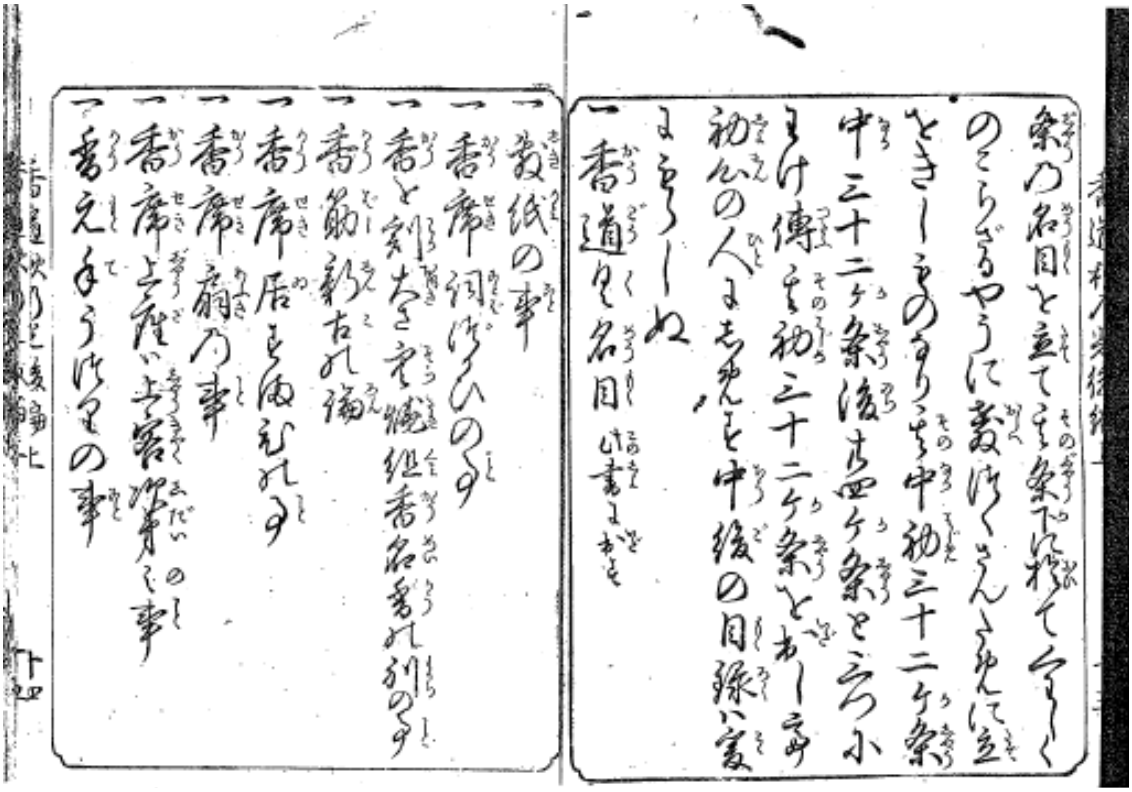


一 人とささやき談合して札打つ事
一 五息、七息の外、是また聞くべからず。香炉をとりもどし聞く事
一 打ちたる札を取りかえ候事
一 香なかばに用所（ようじょ）に立つ事
一 香なかばに扇あらくつかい候事、然れども時分によりつかい候時は、「そろそろ」と分別有りて使い候事

右の条々互いに相嗜むべきものなり。此の法度、古人の書に載せたれば、今初心の人の為にしるし侍る。

## ○香道三十二ケ条

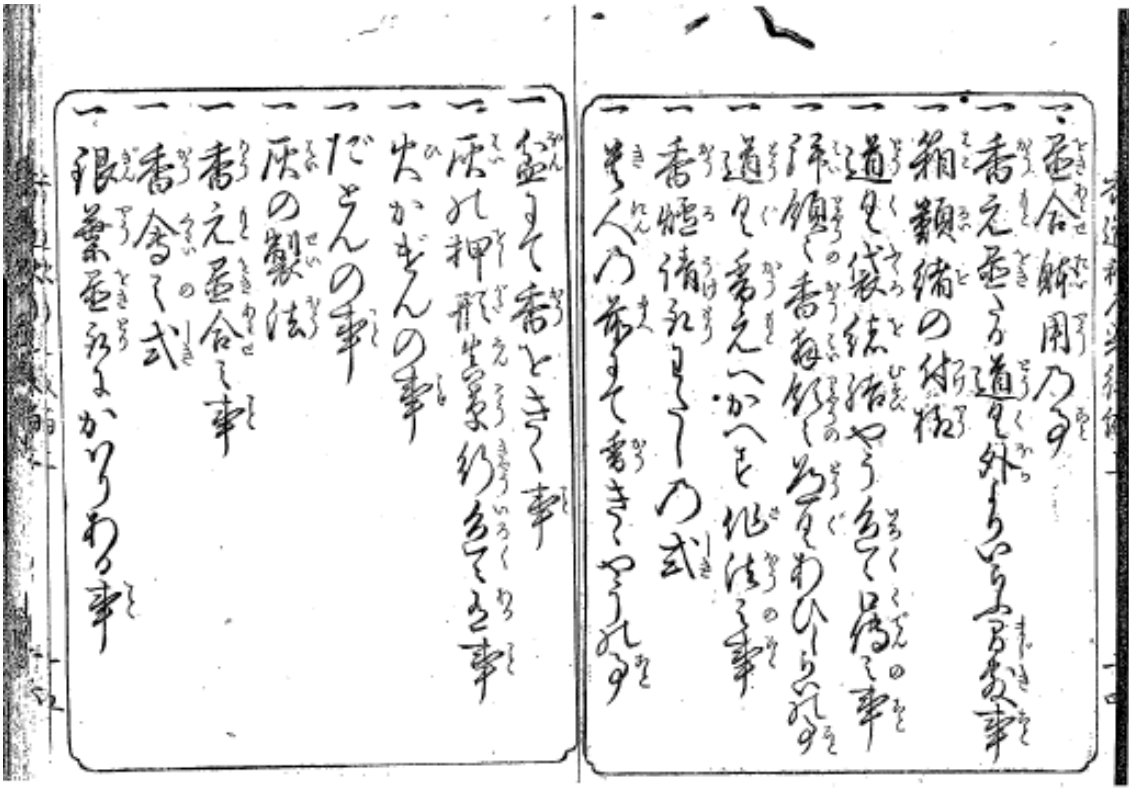
香道稽古の目録の事は、常々香道習練の人へ教ゆるに、先後みだれて教えに規矩（きく）なき時は、教ゆるもの、習う人ともに洋として津涯なし。よって八十八ケ



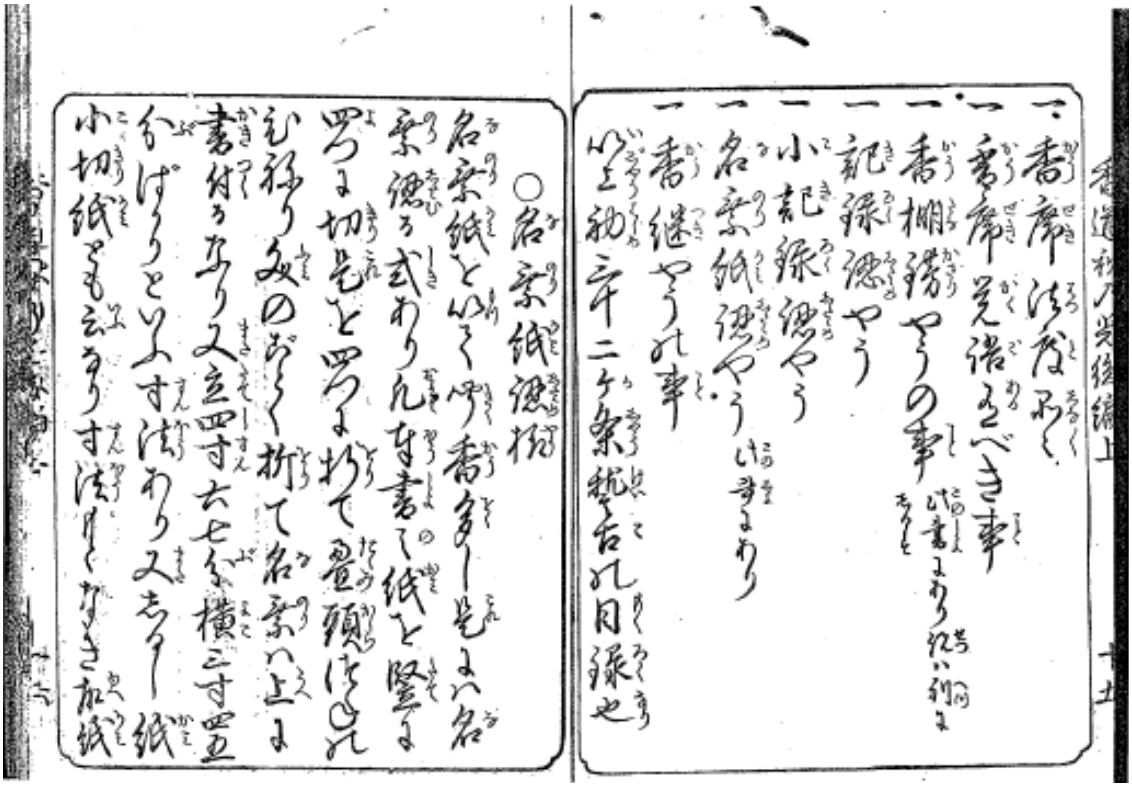
条の名目を立て、その条下に於いてくわしく
のこらざるやうに教えつくさんために立て
おきしものなり。その中、初め三十二ヶ条、
中三十二ヶ条、後二十四ヶ条と三つに
わけ伝う。その初め三十二ヶ条を出だして、
初心の人にしめす。中、後の目録はここ
にもらしぬ。

一　香道具名目　此の書に出だす

一　敷紙の事
一　香席詞(ことば)づかいの事
一　香を割る大きさ、空焼、組香、名香の別(わかち)の事
一　香筋新古の論
一　香席居ずまいの事
一　香席扇の事
一　香席上座は上客次第の事
一　香元手うつりの事



一置き合せ躰用(たいよう)の事
一香元置きたる道具、ほかよりいらうまじき事
一箱類緒の付け様
一道具袋緒結びよう、色々口伝の事
一拝領の香、拝領の道具あいしらいの事
一道具、香元へかえす作法の事
一香炉請け取りわたしの式
一貴人(きにん)の前にて香ききようの事
一盆にて香をきく事
一灰の押し形、真草行色々有る事
一火かげんの事
一たどんの事
一灰の製法
一香元置き合せの事
一香会の式
一銀葉置き取りにかわりある事



一 香席法度品々
一 香席覚語有るべき事
一 香棚飾りようの事　此の書にあり。説は別にしるす。
一 記録認めよう
一 小記録認めよう
一 名乗紙認めよう　此の書にあり。
一 香継ぎようの事
以上、初め三十二条稽古の目録なり。

## ○名乗紙認め様

名乗紙を以って聞く香多し。是には名乗認むる式あり。凡そ奉書の紙を竪に四つに切り、是を四つに折りて畳み、頭つねのひねり文のごとく折りて、名乗は上に書き付くるなり。また、立(たて)四寸六、七分、横三寸四、五分ばかりという寸法あり。また、「しるし紙」、「小切紙」とも云うなり。寸法もとなき故、紙

の大小に随いて定まる法はなし。

［図］

右の図のごとく認めて、中に香の聞きを書き付け出だすべし。

○組香盤立物の図

撰蟲香立物図

直衣烏帽子の人形二つ

茶色

［図］

萌黄

［図］

虫籠(かご)二つ

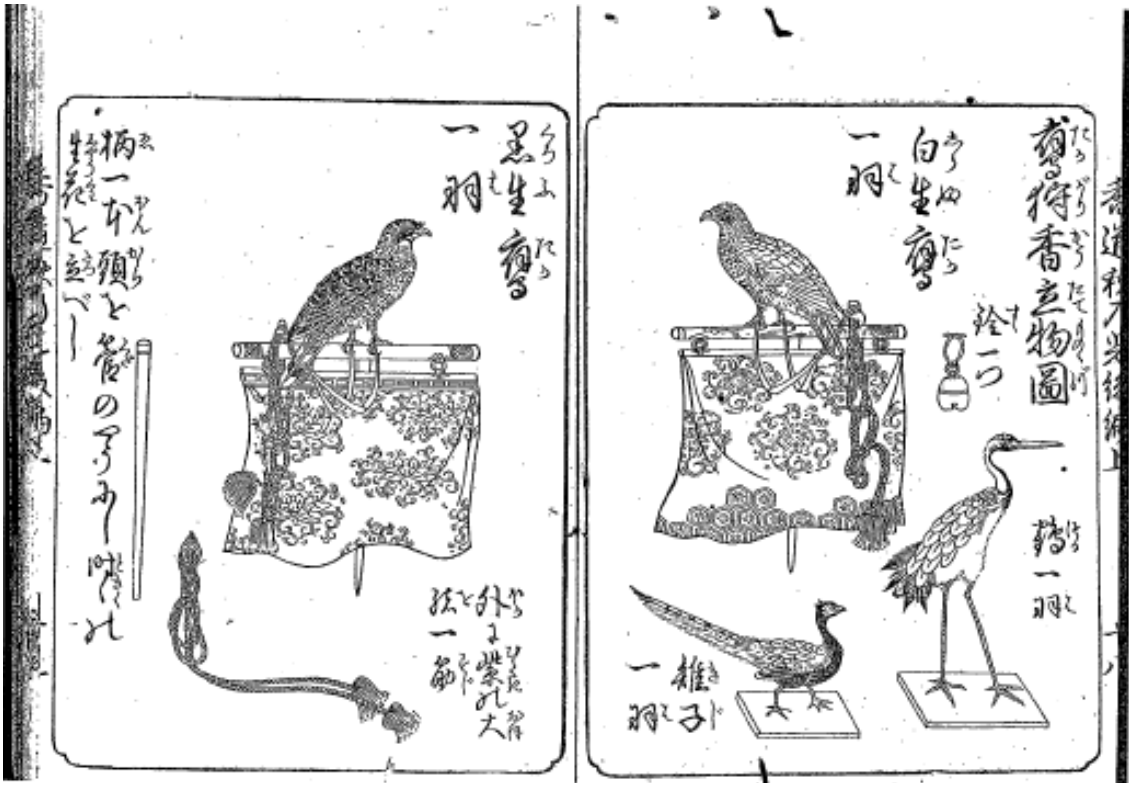
［図］

此の香包五十包

［図］

此の五十包、盤の名に合せ、一目に
五包ずつ置くべし。
盤の花は彩色
絵にかくべし。界(けい)は金粉なり。

［撰蟲香盤の図］




鷹狩香立物図

鶴一羽

［図］

鈴一つ

［図］

白生（しらぶ）鷹

一羽

［図］

雉子

一羽

［図］

黒生（くろぶ）鷹

一羽

［図］

外に紫の大

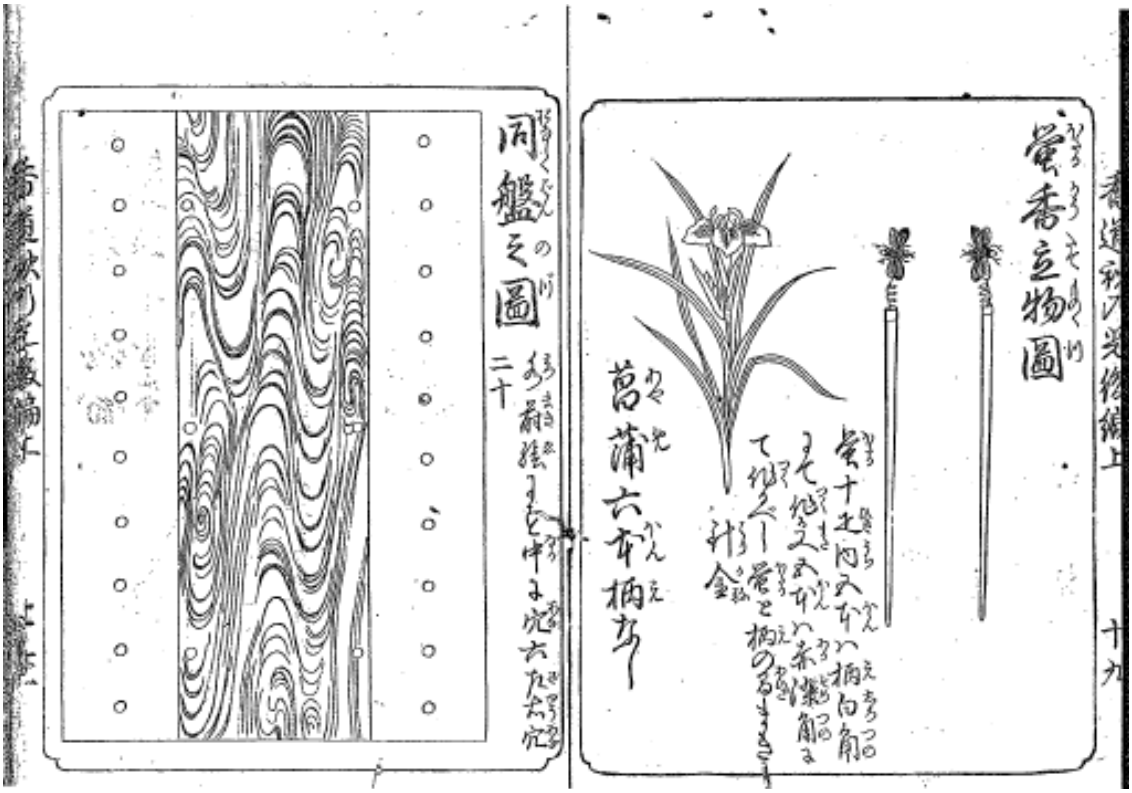
緒一筋

［図］

［図］

柄一本頭を管のようにし、時々の

生花を立つべし。



蛍香立物図

［図］

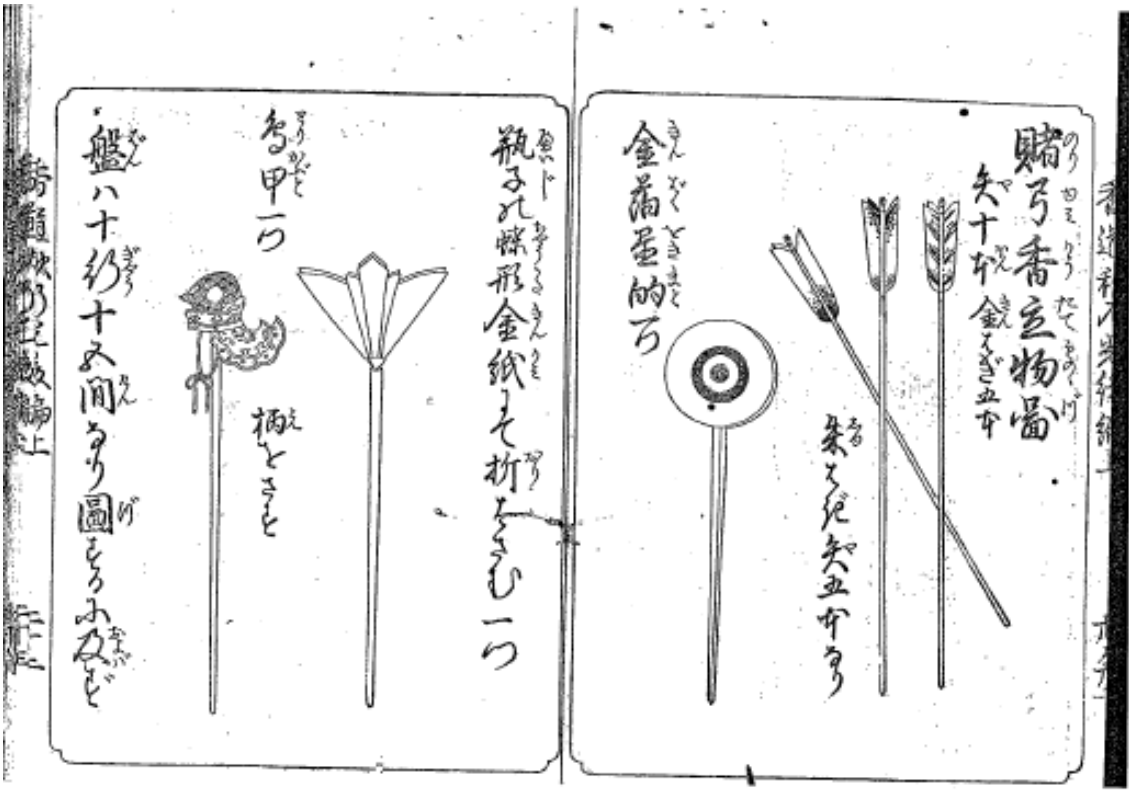
蛍十匹、内五本は柄、白角にて作る。また、五本は赤染角にて作るべし。蛍と柄の間、まき針金

［図］

菖蒲六本、柄なし。

［同盤の図］

水蒔絵にす。中に穴六、左右穴二十。




賭弓香立物図

矢十本　金はぎ五本。

［図］

朱はぎ矢五本なり。

［図］

金箔置き的（まと）一つ

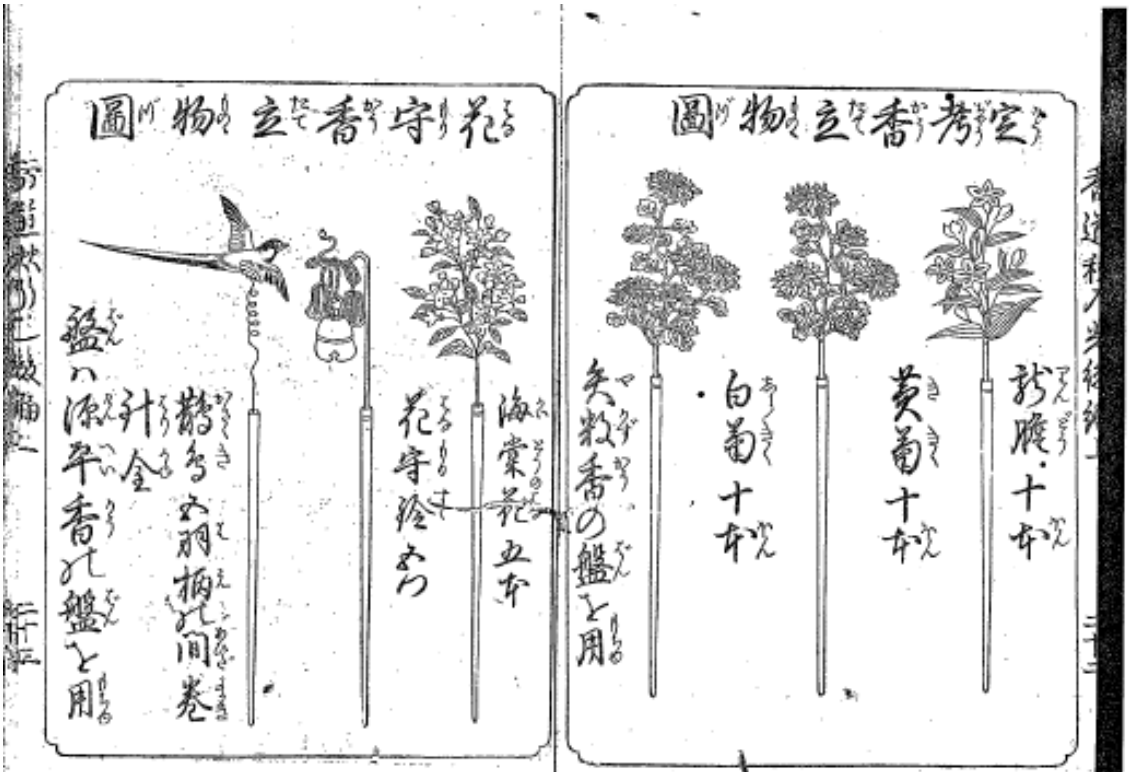
瓶子の蝶形　金紙にて折りはさむ一つ

［図］

鳥兜一つ　　柄を刺す。

［図］

盤は十行、十五間なり。図するに及ばず。




定考香立物図

竜胆十本

［図］

黄菊十本

［図］

白菊十本

［図］

矢数香の盤を用ゆ。

花守香立物図

海棠（かいどう）花五本

［図］

花守鈴五つ

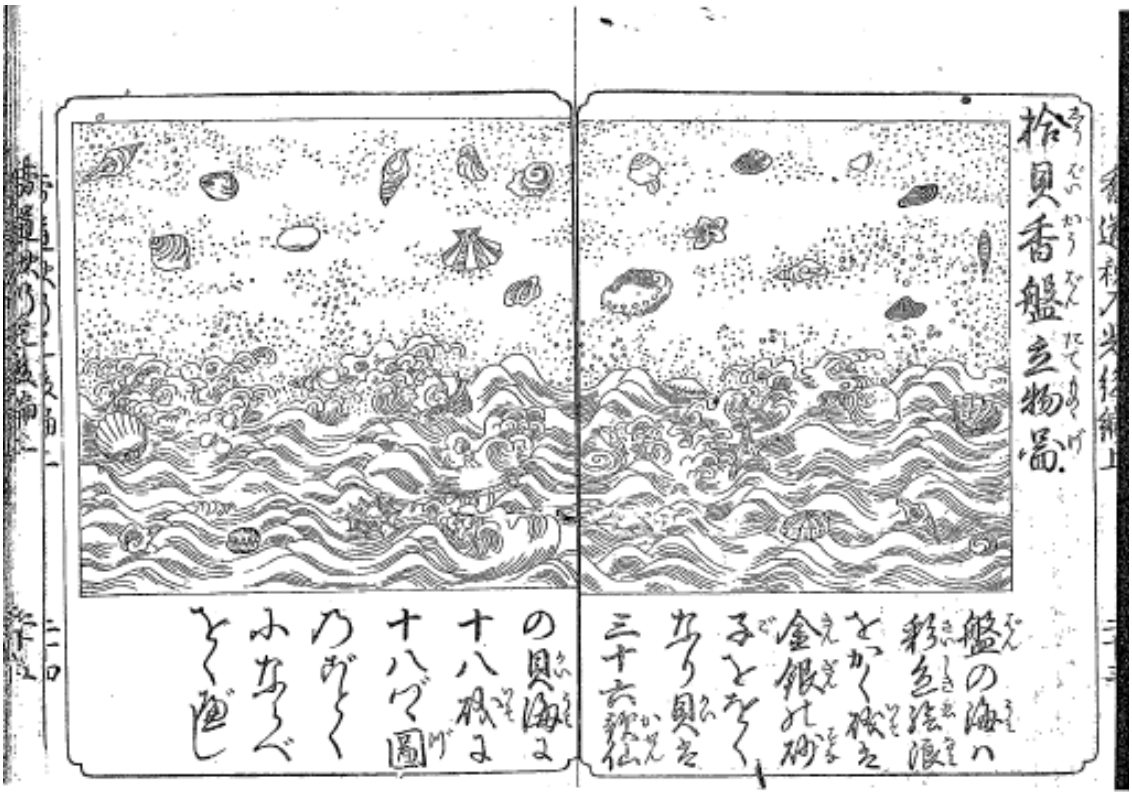
［図］

［図］

鵲鳥（かささぎ）五羽　柄の間、巻

針金

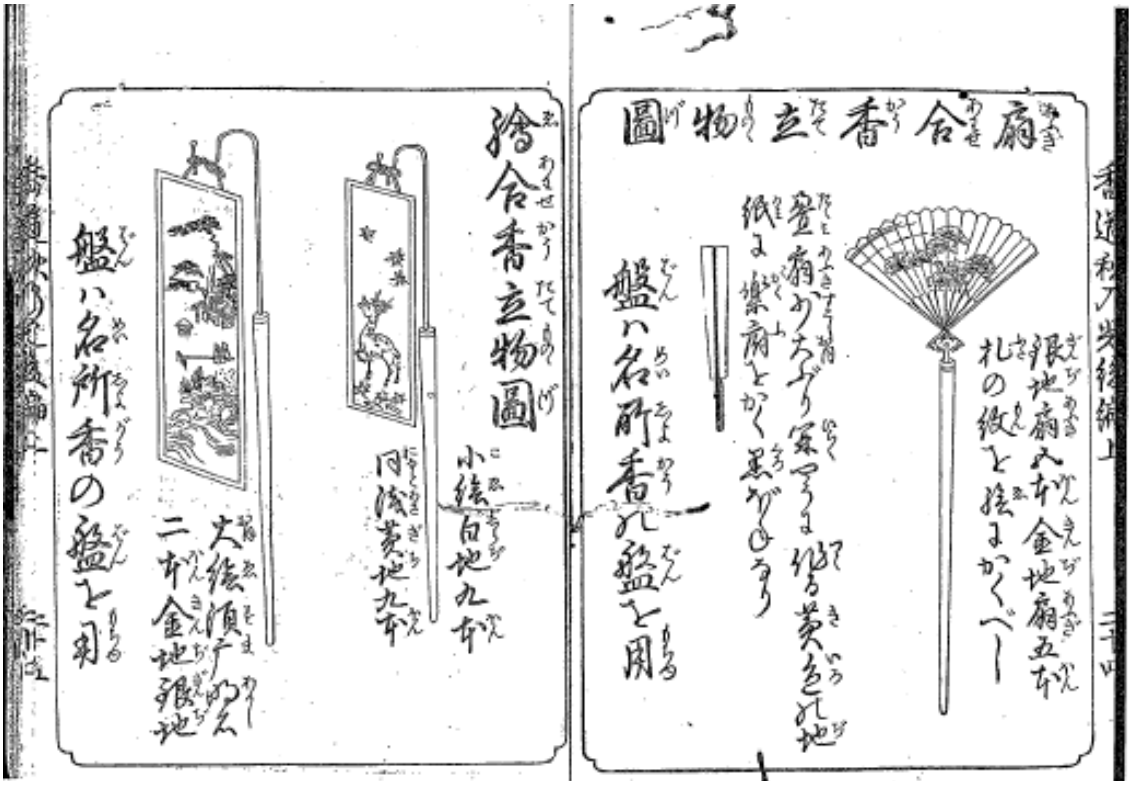
盤は源平香の盤を用ゆ。




拾貝香盤立物図

［図］

盤の海は、彩色絵、浪をかく。板は、金銀の砂子をおくなり。貝は三十六歌仙の貝海に十八磯に十八ずつ図のごとくにならべおくべし。




扇合香立物図

銀地扇五本。金地扇五本。

札の紋を絵にかくべし。

［図］

畳扇少し大ぶり開くように作る。黄色の地紙に楽府（がくふ）をかく。黒ぼね（骨）なり。

［図］

盤は、名所香の盤を用ゆ。

絵合香立物図

小絵白地五本

同浅黄地五本

［図］

［図］

大絵須磨明石

二本金地銀地

盤は、名所香の盤を用ゆ。

長寿香立物図

［図］　慈童人形一つ
右手筆、左手に
は菊の花を持つ

色々の菊十本

［図］
盤は十行十間、百寿の字を
前五十朱、向こう五十字金粉にて書く。

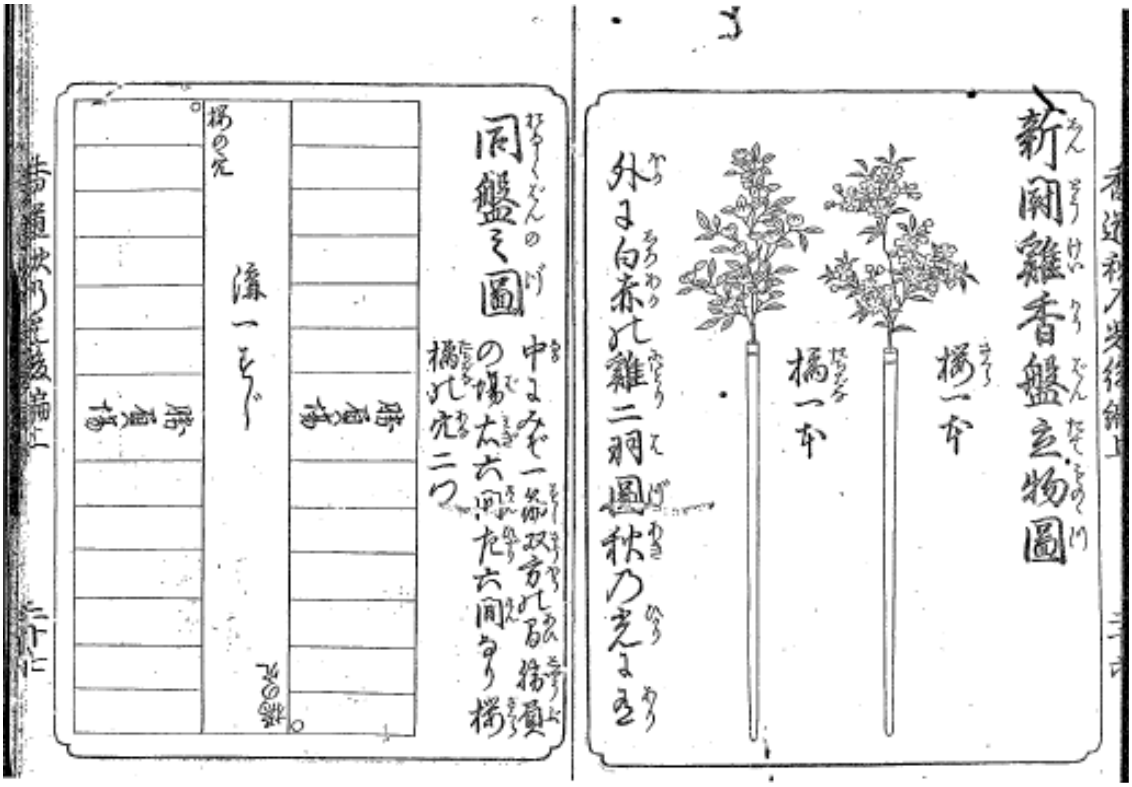
闘草香立物図

［図］　金の釵(かんざし)一本

［図］　夏草十本

［図］
夏草の名はおお(多)にあり
見合わせ考うべし。

源平香の盤を用ゆべし。




新闘鶏香盤立物図

桜一本

［図］

橘一本

［図］

外に白赤の鶏二羽　図『秋乃光』に有り。

［同盤の図］

中にみぞ一筋、双方の間勝負の場、右六間、左六間なり。

桜、橘の穴二つ

桜の穴　　溝一すじ　　橘の穴

勝負場　　勝負場

投壺香立物之図

［図］

投壺一つ 金
にて作る。

［図］

矢十本

矢数の矢 盤も矢数盤を
用ゆ。

［鴛鴦香立物図］

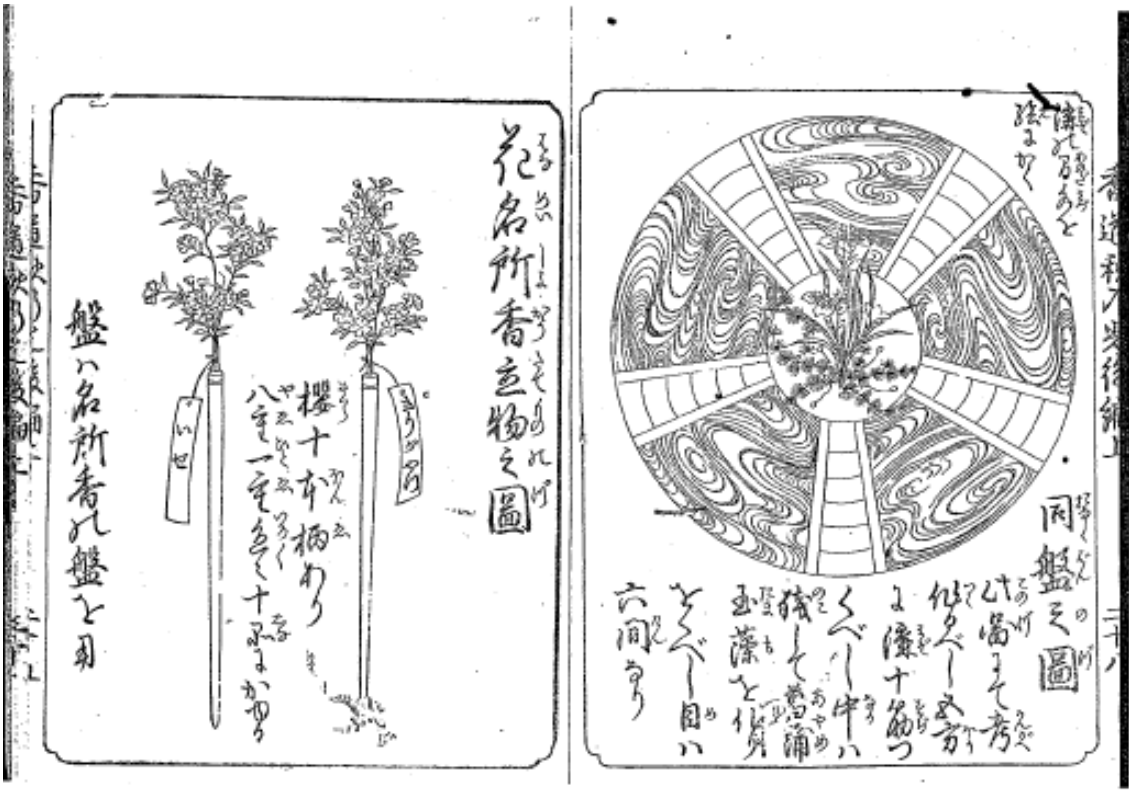
雄鳥　　雌鳥

［図］　　［図］

以上、五双(つがい)十羽なり。

菖蒲、柄なし。
四、五本置物

［図］　　［図］　玉藻




［同盤の図］

溝の間、水を絵にかく。

［図］

此の図にて考え作るべし。五方に溝十筋つくべし。中は残して菖蒲、玉藻を作りおくべし。目は六間なり。

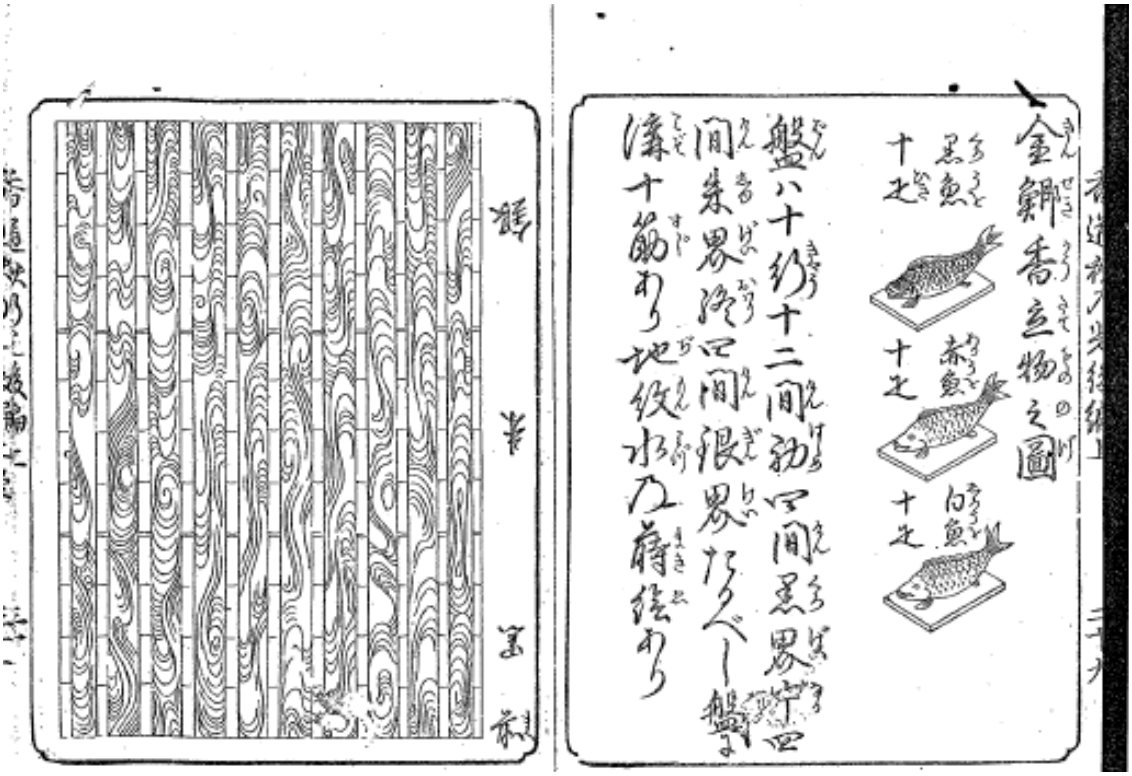
花名所香立物之図

［図］

桜十本、柄あり。八重、一重色々十品かゆる。

［図］

盤は、名所香の盤を用ゆ。




金鯽香立物之図

黒魚　　赤魚　　白魚

十疋（匹）　十疋　　十疋

［図］　　［図］　　［図］

盤は十行、十二間、初め四間黒界（くろげい＝黒罫）、中四間朱界、終り四間銀界たるべし。盤に溝十筋あり。地紋水の蒔絵あり。

［盤の図］

銀　　朱　　黒　　前

羽衣香立物図

［図］

釣人
人形一つ

［図］

天人
人形一つ

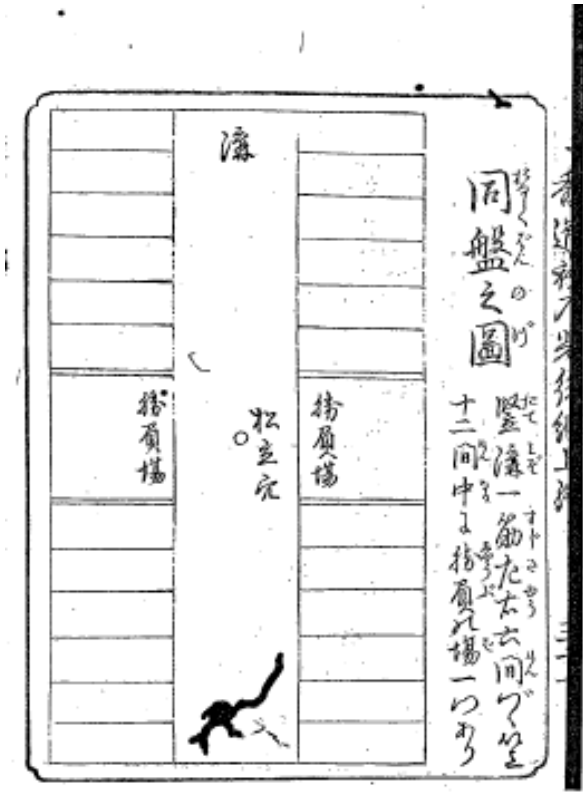
衣懸けの松一本

［図］

衣かける所（松の根元の鈎の部分）

羽衣一つ

［図］




［同盤の図］

竪溝一筋、左右六間ずつ、以上
十二間中に勝負の場一つあり。

勝負場

溝

松立穴

勝負場

上巻終り

【凡例】

① 句読点、「」、送り仮名等は適宜追記しました。
② 旧仮名使いを新仮名使いに適宜改めました。
③ 黒字の（）は、本文内に小文字で記された注記です。
④ 青字の（）は、筆者の補足です。
⑤ 赤字は、判読等に曖昧な点がある部分です。

令和二年三月

『香筵雅遊』國井和裕